

イギリス文学にみられるスポーツについて

C.Doyleと大英帝国

A Study of Sport appeared in English literature

C.Doyle and the British Empire

山田 岳 志
Takeshi YAMADA

The aim of this study is to make clear the literary image of Athleticism in relation to the social structure from the late nineteenth century to the early twentieth century. For this paper, the works of C.Doyle from 1887's to 1927's is examined here. Literary works have been thought to be a useful means of assessing of sports. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. To explain sports through literature seems to be most suitable approach. From this point of view, the image of Athleticism appeared in English literature from the late nineteenth century to the early twentieth century discussed in this paper, mainly concerning between the British Empire and boxing treated in the works of C.Doyle.

1.はじめに

「文学はたしかに一つの社会の表現である。」とはルイ・カザミアンの指摘である。¹確かに文学作品に見られる社会状況や人々のメンタリティといった時代像は、社会史や民衆文化の研究にとって実証的研究にも劣らぬ資料的価値があるように思われる。²そこで本研究は19世紀末イギリス社会において新しい文学傾向となってくる推理・冒険小説を大衆文化の重要な側面として捉え、そこに見られる舞台装置としてのアスレティズムがどのようなものとして描かれているのか、具体的には19世紀末から20世紀初期にかけて近代スポーツとして合理化されたボクシングと³帝国主

愛知工業大学 基礎教育系(豊田市)

義的精神との関わりについて、C.Doyleの諸作品を拠り所としてテーマへのアプローチを試みる。19世紀半ばのイギリス社会を退化と退廃と見立てていたC.キングズレーやT.ヒューズに代表される筋肉的キリスト教徒の思想的展開はパブリックスクールにアスレティズムという固有のモラルとイデオロギーを成立させる契機をもたらした。⁴しかし、マンガンも指摘するように「理想主義や便宜主義までも内包していた」アスレティズムの性格は⁵特殊イギリス的事情を反映するかたちで形成されてきた。村岡が指摘するように、⁶アスレティズムという教育イデオロギーによってパブリックスクールで養成されてくる騎士道的ジェントルマン像は、対内的には身分的弱体化と道徳的低下、さらには文化的身分

制の問題、対外的にはクリミア戦争からポーア戦争にかけての帝国主義的気運のなかにあつて中産階級を中心とする義勇軍運動という社会的意識に支えられていた。つまり、ホブソンが指摘するようにアスレティシズムは「男性的キリスト教から帝国的キリスト教」⁷ にいたる過程で、植民地官僚としての騎士道的ジェントルマンを支える教育イデオロギーとして発展していったのである。こうして帝国支配としての礎石となっていくアスレティシズムにとって、「政治的機関という大衆的教育」⁸ としての性格をもつ文学作品は、それに奉仕するかたちで道徳的武装と帝国主義を支えるイデオロギーとして設備されていく。キプリング、ハガード等の文学活動は帝国主義的気運と連動するかたちで作品のなかに騎士道精神やスポーツを格好のテーマとしてとりあげていった。⁹

本研究では T.ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』がパブリックスクールという教育制度のなかを舞台としてアスレティシズムを若いジェントルマンの行動規範として機能させようとしたのであれば、19世紀末から20世紀初期イギリス社会でアスレティシズムを帝国主義の思想的支柱として機能させようとした C. Doyle の諸作品をとりあげて、特にボクシングに対する C. Doyle の姿勢と帝国主義との関わりについて検討していく。

そのために、① C. Doyle のスポーツの知識、② ボクシングと帝国主義、そしてこれらを統合するかたちで、③ C. Doyle のスポーツ観を概観しながら、C. Doyle の文学作品にみられるアスレティシズムの意義を明らかにしたいと考えている。使用する資料はホームズ物語、歴史小説(Rodney Stone)と C. Doyle の自伝であるが、特に今回は“Rodney Stone”についてはボクシングに関する補助的な資料にとどめた。なお、本研究はイギリス文学作品にみられるスポーツ像の問題を設定するための大雑把な予備的試みでもある。

2. C. Doyle を囲むスポーツ状況

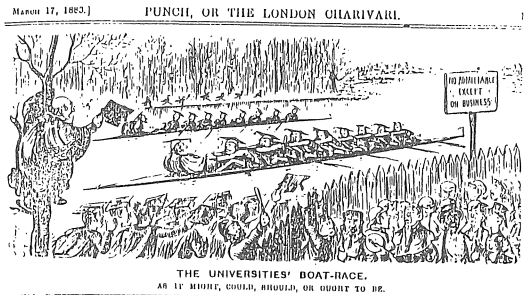
— C. Doyle のスポーツ知識との係りで —

帝国主義的要素を内包するホームズ物語や C. Doyle が強い愛着をもって書いたと言われる歴史小説の内で描かれたスポーツ風俗は、スポーツ史研究にとっても貴重な資料を提供している。C. Doyle 自身「スポーツは私の生涯にかなり大きな役割を果たし、喜びも与えた」¹⁰ と述べるように、パブリックスクール(ストニーハースト校)時代からスポーツマンとして活躍し、40歳代になって、「筋肉づくりをするために例の強い人ザンドウ氏の指導」¹¹ を受けたり、またザンドウ氏の指導の下で自らが『お手本を示し、力と筋肉』のコンテストを開催するなど、身体に対する関心も非常にたかいものであった。また C. Doyle とボクシングとの関係を如実に示してくれる“Rodney Stone”におけるボクシングについての描写は、その知識以上に優れた体験者でもあった。このように、C. Doyle のスポーツ愛好化傾向はイギリス帝国の存在という社会的、歴史的状況からみて、アスレティシズムの洗礼を受けながら時代を生き証しでもあったと思われる。ここでは、C. Doyle の社会観、スポーツ観とも関連してくると考えられる彼のスポーツ知識について考えていく。

「わたしがイギリスで捕虜になっていたとき、どんなスポーツが一般にゆきわっていたか、どんなに人々の精神と生活にスポーツが浸みこんでいるか、……これをつぶさに知って驚いたものだ。走る馬、ケンカする鶏、鼠を噛み殺す犬、殴る人間、人々はここに挙げたものなら、このどれを見るためにも栄光に輝く皇帝陛下のもとすら去っていくだろう。」¹² C. Doyle が歴史小説を考えている間に、気晴らしに書いたと言われるのがこの、“ジェラール物語”であった。この作品について C. Doyle は「この本はナポレオン時代の詳細な調査に満ちており、従って私の軍事的描写はきわめて正確にできていると思う。」¹³ と述べているが、ナポレオン軍のマルボ將軍をモデルとして書いたと言われるこの歴史小説はそのまま18世紀末から19世紀半ばにかけてのイギリス社会の描写でもあったと考えられる。「わたしはこのイギリス的スポーツ精神を彼から学びとったのだ。賭の形になるもの

なら、わが配下の軽騎兵を彼の手下の竜騎兵に対して賭けたことだろう。」¹⁴ スポーツ史上、この時代のイギリス社会において闘鶏、競馬、闘犬、熊掛け、プライズ・ファイトなどの伝統的なブラッディスポーツは19世紀半ばに『合理的娯楽運動』が展開されてくるまで、パトロン・スポーツとして盛大に行われていた。¹⁵ C.Doyleの歴史小説が史実を基本とする姿勢で書かれているところに資料的価値を見出すとすれば、¹⁶ この作品におけるスポーツ風俗の描写はスポーツ史研究にとって価値があると考えられる。「私が向い合ってしまった紳士は体格のがっしりとした、色つやのいい青年で、率直誠実な顔をし、ちぢれた黄色いちょびひげをはやしていた。ひじょうによく光るシルクハットをかぶり、趣味のいい渋い黒の服をきた格好は …… りゅうとした若手の実業家で、生粋のロンドンっ子と呼ばれる階級、つまり精鋭の義勇兵連隊を国にささげ、多くの競技選手、運動家を生み出す点はこの国のいかなる集団にもまさるある階級の出身であることを表していた。」¹⁷、この作品中、事件の依頼主(ホール・バイクロフト)が19世紀半ばからイギリス社会のあらゆる分野でヘゲモニーを掌握していく中産階級出身の若手実業家であることは明白であろう。であればこの若い実業家はパブリックスクールの出身であり、そこで十分にアスレティズムの洗礼を受けたスポーツマンでもあった。ましてこの階級が進んで帝国主義精神の持ち主であったことさえ思えば、義勇兵としての軍隊経験も当然であったと考えられる。C.Doyleはパブリックスクールの実態は勿論、彼らの進路に対しても十分な知識を持っていたのである。そしてパブリックスクールからオックス・ブリッジに至る過程でのアスレティズムについての描写も、C.Doyleのスポーツに対する豊かな知識を披露する結果となっている。「二階に居るのはギルクリストと申しまして学科もよくできるスポーツマンですが、ラグビーとクリケットではこの学校の選手で、ハードルと幅とびでは大学から対抗試合の選手に指名されています。頭もよいし、男らしい青年です。」¹⁸、この作品の舞台は1895

年である。事件の依頼主がホームズに友人(ギルクリスト)を紹介する場面は、C.Doyleのスポーツの知識が十分に生かされたかたちでのスポーツの描写になっている。事実、クリケットは1827年から、ラグビーは1872年から、陸上競技は1864年からオックスフォードとケンブリッジの対抗戦が開始されているのである。¹⁹



「パンチ誌」1883年 3月 17日 より。

また幅とびに用いる運動用具についての知識は C.Doyleが当時のスポーツにいかにか精通していたかの証明でもあった。²⁰ さらに《スリー・クォーターの失踪》におけるスポーツの描写こそは、C.Doyleが19世紀末のアスレティズムの状況について、いかに豊かな知識の持ち主であったかを明示してくれる。この作品中、事件の依頼主と失想した(ゴドリー)はケンブリッジ大学のスポーツマンである。そして大学におけるラグビーの詳細な描写もさることながら、この時代のスポーツマンがいかに英雄像としてのスポーツマンであったかもこの作品は教示してくれる。「僕のチームじゃゴドリーさえスリー・クォーターにいてくれたらあとは二人くらい抜けたって大丈夫だとさえ思っているんです。パスでもタックルでもドリブルでもかなうものはないし、それに頭がいいからチームをしっかりとめてくれるんです。 …… そりゃ第一補欠のムアハウスがいますけど、これはハーフとして練習してきたんだしスクラムにくっついて飛びこんでゆくのは得意ですけど、タッチラインに沿ってはなれて動けというのは無理なんです。それにプレース・キックはあざやかだけれども、スプリントがさっぱり利きませんからね。モートンだのジョンソンだのオック

スフォードの駿足にかかったら子供あつかいですよ。きっと。スティーブソンなら脚だけは早いけれど、判断はわるいし、25ヤード・ラインからドロップキックができないときているんです。パントなりドロップキックなりのできないスリー・クォーターなんておよそ意味ないですよ。」²¹ここでのラグビーの技術的な描写は勿論のこと、それ以上に近代スポーツの資質としての統率力、判断力、役割分担(チーム・ワーク)は19世紀末イギリス社会がスポーツに求めた社会的資質でもあった。「おどろきましたね。私はウェールズとの対抗試合に第一補欠で出たんですよ。それにこの一年大学チームの主将もつとめてきました。……………ゴドリー・ストーンを知らない人がこの国に一人でもいようとは夢にも思いませんでしたよ。ケンブリッジや国際試合に5回も出た精鋭の名スリー・クォーターなんですからね。おどろいたなあ、ホームズさんこれまでどこに住んでいらしたのですか。」²²C.Doyleがホームズ物語を書き出したのが1886年であった。イギリスでラグビーが近代スポーツとして最初の国際試合を行ったのが1870年にイングランド対スコットランドであった。C.Doyleのこの作品が発表される以前の国際試合を体験した(ゴドリー・ストーン)であれば、まさにそれは時代の英雄像として写ったのである。この英雄像としてのスポーツマンの存在すら知らなかったホームズは事件の依頼主にイギリス人として当然の知識すら持ち合わせていないことを批判されるが、こうしたC.Doyleの描写の背景にはC.Doyleこそスポーツマンを時代的英雄像として描きたかった意図がこめられていたと考えられる。この場面は19世紀末のイギリス社会の求めているものがカーライルの英雄像からスポーツマンとしての英雄像への転換期であったことを教示してくれる。²³この《スリー・クォーターの失踪》こそはC.Doyleが近代スポーツとしてのラグビーの知識を示してくれた作品であり、スポーツ史的にも価値のある作品の一つであると考えられる。さて、C.Doyleの作品にみられるラグビーに関する描写は、アスレティズムと階級との結びつきをも明示してくれる。「有名な運動家の家柄でもあり、自身ラグビーの名フォワードだった

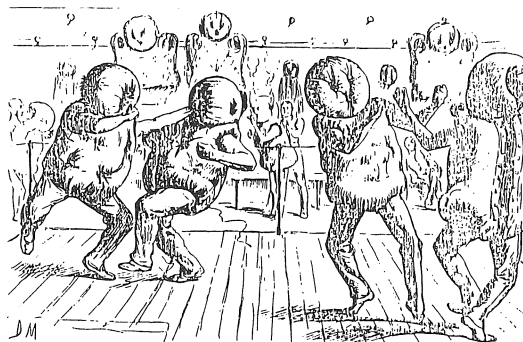
が、とにかくプレーが狂暴になる癖があるので敬遠されがちだった。技は国際級だった。弟もジャッジによってバラの刺しゅうの英国ジャージをつける資格ある名フォワードと見なされていた。」²⁴、「記事の終わりにこうある。……『ライトブルーの敗北は国際級の名手ゴドリー・ストーンンの欠場が主因で、試合の進行中もしばしば痛感された。スリー・クォーターラインに団結は欠けているし、攻防とも弱体で、ためにチーム全体の懸命な努力も及ばなかった。』²⁵。ラグビー選手のジャージーは元来が騎士道的起源をもつと言われているが、スポーツにジャージーが採用されるようになるのは19世紀半ば頃からであり、『トム・ブラウンの学校生活』におけるラグビー試合ではまだ採用されていなかった。²⁶アスレティズムにみられるカラーのシステムに象徴されるスポーツの世界の階級性は、そのまま社会の階級構造でもあった。²⁷このようにC.Doyleがスポーツマンにとってジャージーのもつ意味にまで言及したことは、彼のスポーツ知識が単に技術だけにとどまるものでなかった、ということを示してくる。さて、C.Doyleのスポーツに対する知識で特筆されるべきはボクシングについてである。「健康をもとめてここ数年間の私は文学的著作に関してはほとんど語らなできたが、この時期の主な作品である『亡命者』は、摂政時代の研究に伊達男と懸賞拳闘士を配して書いたものである。私は元来古い懸賞拳闘士のことはあまり知らないし、懸賞拳闘リングの知識もあまりない。」²⁸このように述べるC.Doyleであるが、彼の作品中、舞台を摂政時代にとった歴史小説でボクシング小説と言われる“Rodney Stone”がある。この作品でC.Doyleは摂政時代のシンボルとしてのダンディ像を超えて英雄像に係るボクシング論を展開しているのである。

He was a type and leader of a strange breed of men which has vanished away from England — the full — blooded, virile buck, exquisite in his dress, narrow in his thoughts, coarse in his amusements, and eccentric in his habit

. They walk across the bright stage of England history with their finicky step, their preposterous cravats, their high callars, their dangling seals, and they vanish into those dark wings which there is no return. The world has outgrown them, and there is no place now for their strange fashions, their practical jokes, and carefully cultivated eccentricities. And yet behind this outer veiling of folly, with which they so carefully draped themselves, they were often men of strong character and robust personality. ²⁹

この“Rodney Stone”で採用されていくのが、1814年のけんとうクラブのルールである。摂政時代はボクシングの黄金時代でもあった。「まあ危険な男という評判ではあるね。騎手としてはイングランドきっての命知らずだろう。2,3年前グランド・ナショナルで2着にはいったはずだ。いってみれば遅く生まれすぎた男なんだな。摂政時代にでも生まれていれば一代の伊達男で通っただろう。ボクサーであり、運動家であり、競馬では向こう知らずの賭博師……」³⁰ 摂政時代のジェントルマンといえば狩猟家として、競馬馬の馬主として、アマチュアのボクサーとして、さらには血気さかんな伊達男という資質が条件であった。³¹ このように19世紀初期のジェントルマン像にはダンディな側面があったが、しかし、強い性格としてのジェントルマン像もあった。³² C.Doyleはこうしたジェントルマンの性格を見事に描写している。「ラフトン公の邸宅には夕方になるとスポーツの愛好者がたくさん集まったものだ。ここではブドウ酒を大いに飲み、賭に熱中し、狩馬や狐のことなどが話題になった。こういう風変りな連中を今でも何とよく忘れずに覚えていることか、……この連中は同じ穴のムジナであって、酒飲みで、無鉄砲で、カンカ早く、賭博師で、……とてつもないむら気の持ち主であった。」³³ こうした場面、つまりジェラルド將軍がみた光景こそ19世紀初期ジェントルマンの生活習慣でもあったと考えられる。

さて、C.Doyleのスポーツに対する知識の概観を試みた。それは19世紀初期から20世紀初期にかけての下層階級から上流階級までのスポーツの状況であった。このことは、C.Doyleのスポーツに対する知識が階級に偏しない幅広い豊富なものであったことを物語るものであった。特に歴史小説との係りでボクシングに対する知識はC.Doyleの社会観、スポーツ観を確立していくための重要な要素になっていく。



ATHLETICS.
SPARRING WITHOUT PAIN OR LOSS OF TEMPER—THE CUMBERBINE BOXING GLOVE SUPERSEDED

「パンチ誌」 1869年 9月 4日 より。

3. C. Doyleと帝国主義

— 退化と退廃との係りで —

C.Doyleが公人としてボーア戦争に出かけたりあるいは文学作家として、また歴史小説家として活躍した時代は、アスレティズムがゲーム崇拜にむかって帝国主義的精神を支えるイデオロギーの一部になり、イギリス社会により明確な目的志向性を与える役割を与えられた時期でもあった。³⁴ こうした社会的状況を背負ってC.Doyleは、スポーツ(特にボクシング)を国防との係りで捉えていく。そして、「スポーツは人間のするものであって、馬のするものではない。」³⁵ と述べるように、C.Doyleにとってスポーツとはするスポーツであって、観るスポーツではなかった。こうしたC.Doyleのスポーツに対する姿勢から「私は一つのものに専心しなかったから何にでも二流どころにすぎない。万能選手をもって任じていたし、それによってこそスポーツの楽しみを何人にも劣らず味わってきたと思っている。」³⁶ こう述べるC.Doyleのが体験したスポーツといえば、ラグビー、ゴルフ

、クリケット、ボクシング、サッカー、フェンシング、ビリヤード、狩猟、自転車、乗馬と多種多様であった。さて、19世紀末のミュージック・ホールが大英帝国を支えるジンゴイズムのメディアとしての側面をもつとすれば、サバタリアン・ムーブメントの俗化は大衆スポーツへの道を切り開いていく契機になった。³⁷ こうして大衆文化としてのミュージック・ホール、大衆スポーツ、そしてパブリックスクールにおけるアスレティズムは1897年のダイヤモンド・ジュビリーにおいて大英帝国の一体性を鼓舞するものとして機能していった。C.Doyle自身も「あのころでも国民の思想はきわめて軍事的であった。」³⁷ と述べているように、ミュージック・ホールでのジンゴ・ソングやパンチ誌等によって帝国主義敵社会を熟知していたと考えられる。そしてC.Doyleはこうした社会状況のなかから歴史小説、冒険・推理小説を通して時代精神を擁護していくのである。しかもC.Doyleが「私たちは愛国的群衆であり、小さな体には愛国的精神の血潮が流れていた。」³⁹ と述べているように、パブリックスクール時代から感覚的にも愛国的精神がアスレティズムを通して形成されたと考えられる。ここではC.Doyleが体験したボーア戦争から第一次世界大戦にかけてのイギリス社会と、C.Doyleにとってこの両戦争がどんな意味をもっていたかを考えてみる。さて、「イギリス帝国の健康を保持したいと思っただけで手にはしなければならないのは、ウィングラスではなくて小銃なのである。」⁴⁰ と述べるC.Doyleは自らボーア戦争への志願兵として、40歳という年齢で応募したがすぐには採用されず、結果的には友人、ジョン・ラングマンが計画した野戦病院の補助的医員兼総監督という立場で南アフリカへ渡ることになる。このボーア戦争における思考・行動がC.Doyleの戦争に対する姿勢であったと言われる。このボーア戦争の起こりは、イギリスの植民地帝国主義的動機によるものであったが戦争もスポーツ感覚で捉えたC.Doyleの行動原理は、ジンゴイズムの風潮に同調するかたちで帝国主義を支えたのである。しかし、ボーア戦争はイギリスの国際的孤立化を招くと同時に、国内的には新たな社会問題、つまり階級的矛盾をさらけ出す

ことになっていった。それは労働者階級の子弟の道徳的退廃から生じた身体の弱体化という問題であった。「ボーア戦争時は、それまでしばしば社会主義者たちが強調してきた人民大衆の身体の状態の悪さが、一般の認めるところとなってきた。1893年から1910年の間の医学的検査を受けた70万人の新兵の3分の1以上が軍務に服するのに適しないと判断されたが、徴兵検査官は、もっと多くの若者が検査そのものさえ受ける身体的条件を具えていないとして、兵役から除外する者の割合を60%という高さにした」⁴¹ こうした認識はイギリスの学校教育に大きな影響を与えていった。伝統的にイギリスは志願兵、義勇軍制度によって国防が支えられていたが、マンチェスターをはじめ工業地域での大量の徴兵不合格者が公表されると、貧困と保健状態の悪化の問題はイギリス国民の身体的退化現象に注意を向けさせるようになった。⁴² また、国民の身体的退化を道徳的退廃と結びつける傾向にあって「『男らしいクリスチャン』という理想や、人格の形成のためのスポーツという観念がパブリックスクールから公立学校に移植され、規律や勇気や忠誠心などといった徳目の育成を目指して、勝ち負けを重視する集団競技が急速に普及しはじめた。帝国主義の浸透は、ときとしてあからさまに軍事的な形態をとる。高学児童を対象とするライフル射撃クラブや学生軍事教練団などの設置が、その一例である。」⁴³ こうしてイギリスにおける学校教育は身体的向上という側面を強調しながら、ホブソンが指摘するように「愛国心を装う帝国主義のための学校制度」⁴⁴ が展開されていく。C.Doyleの作品には直接帝国主義と教育についての言及しているところはない。しかし、彼の自伝で国会議員に立候補した理由をボクシングの用語を駆使しながら、またマージナルなスポーツに参加しながら、「このボーア戦争に負けたら国家的恥辱であるばかりか、帝国の存亡にも関することになりかねない。」⁴⁵ というC.Doyleの訴え、特に国家防衛、帝国存続の強調は彼の社会観であった。まさにC.Doyleの社会観は帝国主義的社会を支える精神であったと考えられる。こうしてC.Doyleはボーア戦争後も彼独自の国防改革論を展開していくのである。

「最善をつくそうとする時のイギリス士官はすばらしい。みな公立学校出なのだ。」⁴⁶、「それまでは私はわが軍の兵士たちの生命が、ひいてはイギリスそのものが陸軍の保守主義のために危険にさらされる実相をみてきたし、新しい軍事的見解が生まれぬ限り将来も同じ危険が起るものと固く信じていた。」⁴⁷

「悲しいことにイギリスの官僚気質はひどく堅い団結力を持ち、彼らを攻撃しなければならぬ時、相手から正義や公平は期待できない。むしろそれは互いの不利を暴露せぬよう誓いあい、国民の利益よりも誤った忠誠観を大切にする強固な組合なのだ。」⁴⁸ C.Doyleのこうした批判は、階級社会の構造をそのまま反映している軍事的聞こうに対する批判であった。大英帝国の存在を肯定する C.Doyleは近代戦争における兵器の改良とともに、国民の総力戦としての可能性をも示唆した提案をしていくのである。⁴⁹ このように、C.Doyleはホブソンが指摘するような帝国の存在を侵略行為とみるよりも大英帝国を肯定する社会観を打ち立てていく。ホブソンが「19世紀を通じてイギリスの秩序と発展を確保したものは、普通の市民的並に産業的な徳の観養及び実践であり、それを天然資源並に歴史的偶然性の利点が助けたのである。我々はこれの代わりに軍隊の道徳律を置き替えようとするのだろうか。それとも、一つは良き市民の発達を促進した他は良き兵士の発達を促進するという二つの相容れない主義の絶えざる衝突によって、国民の精神に行動を迷わそうとするのだろうか。」⁵⁰ と述べる前に、繁栄と栄光という「イギリス帝国というものが存続するかぎり、私の生活に事欠くことはない。」⁵¹ と述べるC.Doyleにとって、「わが国のりっぱなボーイ・スカウト運動や、予備軍を形成している退役兵たちの運動のことをはなした。老いも若きも新しく、犠牲的な愛国心に富む運動を行える国こそ生きたる国です。」⁵² C.Doyleにとって帝国主義的精神の支えはスポーツであった。

4.C.Doyleのスポーツ観 ー ボクシングと帝国主義的精神との係りで ー

「シャーロック・ホームズは、運動のための運動はあまりしない男だった。彼ほど筋肉運動のできる人は少なかったし、ある重量の級では、私の見たこともないすぐれた拳闘家の一人であることは疑いもなかった。ところが目的のない肉体運動は精力の浪費だとして何か職業上の目的でもないかぎりは、からだを動かすことはあまりしなかった。」⁵³、C.Doyleの自伝によれば、「元来がものごとに熱中する性質だから面白いものであれば、何でものがさなかったし、享楽については人後におちなかつた。……ゲームごとにもできることは何でもやった。」⁵⁴ というように、C.Doyleは若い時からあらゆるスポーツを体験したスポーツマンであった。こうした彼がボクシングにこだわるのはどんな理由があったか、ここではC.Doyleのボクシングに対する知識、体験それに歴史認識を通して彼のスポーツ観について考えてみる。

「私はボクシングというイギリス古来のすぐれたスポーツにはずっと興味をもちつづけ、自分ではどのクラスに属するとはいわぬが、フォームの点ではアマチュアとしてかなりのものだといってよいと思う。教えるより習うことをもってしていたら、私はかなり強くなっていたと思うが、初めの練習期間のほかは私にはプロ選手に教わる機会がないままになった。」⁵⁵ と述べるC.Doyleのボクシングに対する知識、体験は特筆されるものである。それに C.Doyleのボクシングに対する姿勢はイデオロギーとしてのボクシングであったと考えられる。C.Doyleのボクシングについての知識は、“Rodney Stone”を書くにあたって懸賞ボクシングに関する知識をピアス・イーガンの『ボクシアーナ』や、ヘンリー・ダウンズ・マイルズの『ピュージリステイカ』から求めていた、と言われている。⁵⁶ C.Doyleはボクシング小説を書く時、ボクシングの性格な歴史を把握してから臨んだのである。⁵⁷ そしてボクシング小説、“Rodney Stone”におけるボクシングに対する C.Doyleの姿勢、それこそ彼のスポーツ観であった。この“Rodney Stone”では摂政時代が設定されている。この時代の特徴は、モラルの低下、華美志向、ダンディの時代と言われ、摂政時代のジェントルマン像といえ、ボクサー、スポーツマン、

賭けの花形」としてのダンディ像であった。しかし、C.Doyleは時代の負性としてのダンディ像をボクシングを通して英雄像へと転化させていく。その過程でボクシングはC.Doyleにとってイデオロギーとなっていく。ではC.Doyleはなぜ摂政時代のボクシングを強調していくのか。19世紀初期はボクシングにとって黄金時代であったと言われる。ジェイムズ・フッグによる拳闘術、剣術、棒術を教える学校の設立は、やがてピューリストと称される職業拳闘家を生み出すようになり、やがてはパトロン・スポーツとして発展していった、と言われている。⁵⁸ そして、C.Doyleにとっても「旧式の懸賞ボクシングが国民的見地からみてりっぱなものであったという私の意見は隠しもせぬが、それはグローブを使用する新しいボクシングが現代においてそうであるのとまったく同じである。」⁵⁹ と述べるように、C.Doyleがボクシングについて語る時、それは懸賞ボクシングであった。しかし、スポーツ史研究が教示してくれるように懸賞ボクシングは blood sportとして批判されてきたものであるが、しかしパトロン・スポーツには家父長主義的の社会を支える社会的装置としての側面もあった。⁶⁰ こうしたパトロン・スポーツのもつ性格が1814年にはロンドンに The Pugilistic Club が結成されるなどして、懸賞ボクシングは盛況をきわめたのである。確かに、ジャック・ブロートンによる《ブロートンズ・コード》と呼ばれるルールが設けられたとは言え、懸賞ボクシングには賭博性が非常に強かった。そのために不正、八百長試合が仕組まれることもあった。C.Doyleはボクシングの知識として19世紀初期の社会状況も十分把握していたと考えられる。“ジュラール物”といわれる彼の作品にもこうした状況を描写しているところが散在するのである。「何をかくそう、このわたしはブリッスルのバスラー、ライト級の拳闘選手。この下に見える所はわたしの練習場」⁶¹ このバスラーの相手になるのがジュラール准将で、このフランス人にとってバスラーが、片腕を突き出し、もう一つの腕を胸に当てながらとる姿勢は、あまり見かけないものであった。話しをもどすと、バスラーはジュラール准将から膝にキズを負わされるが、この時バ

スラーのトレーナーが、「この膝が今度の水曜日までによくなっていねえと、あんたは八百長をやったってことに受けとられ、今後賭け主を探すのは、なかなか面倒な仕事になるぜ。」⁶²、「19勝を今までにあげているが、誰からも八百長のヤの字も耳にはいったことはないね……」⁶³「ラフト公だけでも54ポンドあんたにかけられることを知らないのかね。水曜日の試合にできれば、5万人分の金をひっさげてリングにあがることになるんだぜ。」⁶⁴、「拳闘の競技規定、厳格に懸賞拳闘試合の規則に従って奴は戦うと思ってたんだ。」⁶⁵ C.Doyleのボクシングに対する知識は正確に19世紀初期のボクシング史を準っているのである。さて、パトロン・スポーツとしての懸賞ボクシングは伊達男のジェントルマンによって支えられていたが、これは元来流血を覚悟で素手で闘う荒々しいスポーツであった。C.Doyleは「古い時代の荒っぽい様相を活写するものとして」⁶⁶、スポーツとしてのボクシングを賞賛するが、その目的は何であったか。それは blood sportがもつ、もうひとつの側面、つまりボクシングを「男らしさ、勇気、忍耐」といった伝統的価値を支えるイギリス的スポーツと見ていたからである。⁶⁷「わが国のスポーツは優柔になるキケンをさけるために、常にやや荒っぽいもののほうがよい。」⁶⁸と述べるように、C.Doyleはボクシングこそイギリスの伝統的価値を支える道具とみていた。彼のボクシング小説、“Rodney Stone”もこうした観点からの指摘であったと考えられる。

for good or evil, the love of the ring was confined to no class, but was a national peculiarity deeply seated in the English nature, and a common heritage of the young aristocrat in his drag and of thorough costers sitting six deep in their pony cart. ⁶⁹

The ale-drinking, the rude good-fellowship, the heartiness, the laughter at discomforts, the craving to see the fight — all these may be set down as vulgar and trivial by those to whom

イギリス文学にみられるスポーツについて

they are distasteful ; but to me, listening to the far-off and uncertain echoes of distant past, they seem to have been the very bones upon which much that is most solid and virile in this ancient race was moulded. ⁷⁰

さて、C.Doyleのボクシングへの傾注は時代的条件とも関係していたと考えられる。「第一次世界大戦後に世人は、ボクシングの復こうに努力した私たちの成果がどんなものであるかを、はっきり見てとったに違いない。……なぜかというこの危機において……歴史の将来を決定する時にあたって……ボクシング大きな役割を果たしたからである。」⁷¹、と述べるC.Doyleのボクシングへの賛美は帝国主義的精神と結びついていく。「ボクシングは兵士たちに敢闘精神と積極的な行動力を与え」⁷²るものであった。イギリス社会がポーア戦争から第一次世界大戦へと、その帝国主義的気運を高めていく過程で、C.Doyleはまさしく時代擁護者としての立場を貫ぬいていく。ホブソンが指摘するように「一般大衆のためには、英雄崇拜と人目をそばたてるような榮譽、冒険と競技精神に対するヨリ粗野な訴え、即ち闘争本能を直接的に刺戟するために粗野なけばけばしい色彩で変造された現代史がある。」⁷³と。それとは反対に愛国的精神を支えるアスレティズムとしてのボクシングは男性的キリスト教徒を帝國的キリスト教徒へと橋渡ししていく奉仕としての設備であった。ボクシングが近代スポーツとして合理化されてくる過程でスパarringは、アスレティズムとしてのボクシングを形成していくようになる。

Modern boxing, or more properly speaking sparring, which means only the use of the gloves, has been saved from falling into the same disrepute as partly pugilism, by the innate love of the healthy-mind Britisher for it and partly by the efforts of a few amateur club

74

さて、「一フランス人がそのクラスで最高のボクサーになったことは、国民全体の肉体的自信を高めた。それが一人一人に染みわたった。」⁷⁵、C.Doyleにとって、ボクシングによって養成される果敢な精神、フェアなプレーこそは帝国主義を支える精神的条件であった。ホブソンが攻撃的な帝国主義の原動力とみなしていた闘争と支配という原始的欲望は、大衆向けには英雄崇拜、それを支えるスポーツ精神によって支持されてくる。C.Doyleはまさしくボクシングと愛国精神を結びつけたのである。



「パンチ誌」1858年1月23日より。

おわりに

イギリス・スポーツ史が教示してくれるところによれば、ピューリタニズムとしての性格をもつボクシングが大きく改革されてくるのが摂政時代と言われる19世紀初期であった。イングランドにおける懸賞拳闘試合の初代チャンピオンのフィグは、ボクシングを“高貴なもの防衛術”として伊達男達の若いジェントルマンの師範となってボクシングを形式化し、また、フィグの弟子ブロートンは1743年にボクシング史上ではじめてルールの明文化をはかると同時に、1747年、〈マフラーズ〉と称するグローブを導入した。これらの主たる目的は、上流階級の子弟の自己防衛の技芸としてであった、と言われる。⁷⁶ こうしたボクシングの社会的状況をジャクソンによって手ほどきを受けたパイロンは次のように記している。

Thursday, 17 March 1814

I have been sparring with Jackson for exercise this morning ; and mean to continue and renew my acquaintance with the muffles. My Chest, and arms, and wind are in very good plight, and I am not in flesh. I used to be a hard hitter, and my arms are very long for my height (5 feat 8-inches). At any rate exercise is good, and this the severest of all ; fencing and the broad-sword never fatigued me half so much.⁷⁷

このように摂政時代はパトロン・スポーツとしてのボクシングが盛んになってくるが、C.Doyleにしてもこの時代のボクシングに関する描写は得意である。「ねえ、フラトン公《拳》をはめたら怪我はしないですむよ。……《拳》とはどんなものか、わたしはわからなかった。ところがまもなく大きな皮のかたまり……フェンシング用のグローブに似てないでもないが、それより一回りほどの大きなものを4個持ち出してきた。」⁷⁸、C.Doyleは摂政時代のスパarringを正確に準っているのである。そして、“Rodney Stone”もこうした世界を活写したボクシング小説であった。さて、C.Doyleは歴史小説、ホームズ物語を通してボクシングを擁護してきた。富山によれば、C.Doyleにとってボクシングは自己の境遇から脱却するための身振りであったと指摘しているが、⁷⁹ さらには世紀末文学としての大衆文学にはスポーツに期待されるものを社会的要求とみなして、スポーツ風俗をとり入れ、時代的精神を代弁した傾向がみられる。であれば、C.Doyleもその代表者に加わる資格を十分持っていた、とも考えられる。

引用・参考文献

1. 島田謹二 : ルイ・カザミアンの英国研究, P.25, 白水社、東京、1990.
2. 垂水節子 : JUSTITIA, ②, P.360~361, ミネルヴァ書房、京都、1991.
3. 松井良明 : 19世紀イギリスのボクシン

グにおけるスパarringの果たした歴史的意義について、スポーツ史研究、第3号、P.12, 1991.

4. 阿部生雄 : “筋肉的キリスト教”と近代スポーツマンシップの理念形成、一チャルズ・キングズリを中心として、岸野雄三教授退官記念論文集『体育史の探求』, P.118, 1982.
5. J.A.Mangan, : Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School, P.9, Cambridge Univ, Press, 1981.
6. 村岡 健、鈴木利章、北川稔編、: ジェントルマン、その周辺とイギリス近代、P.232, ミネルヴァ書房、京都、1987.
7. J.A. ホブソン(矢内原忠雄訳) : 帝国主義論、下巻、P.129, 岩波文庫、東京、1976.
8. J.A. ホブソン : 前掲書、P.128.
9. P.クースティアス、J.P.プチ、J.レイモン(小池 滋、白田昭訳)、: 19世紀イギリス小説、P.112, 南雲堂、東京、1986.
10. C.ドイル(延原 謙訳)、: わが思い出と冒険、P.293. 新朝文庫、東京、1965.
11. C.ドイル(延原 謙訳) : 前掲書、P.255.
12. C.ドイル(上野景福訳) : 勇将ジュラールの冒険、P132. 創元推理文庫、東京、1972.
13. C.ドイル(延原 謙訳) : 前掲書、P.144.
14. C.ドイル(上野景福訳) : 前掲書、P.109
15. P.Bailey, : Leisure and Class in Victorian England, Rational recreation and the contest for control, 1830 — 1885, P.16, Toronto Univ, Press, 1987.
16. C.ドイル(上野景福訳) : 前掲書、P.297
17. C.ドイル(阿部知二郎訳) : 回想のシャーロック・ホームズ、P.80. 創元推理文庫、東京、1990.
18. C.ドイル : シャーロック・ホームズの叡知、P.161. 新潮社、東京、1992.
19. 寺島善一 : イギリスのスポーツ、『最

イギリス文学にみられるスポーツについて

- 新スポーツ辞典』、P.70。大修館、東京、1987。
20. C.ドイル(延原 謙訳)：シャ シャーロック・ホームズの帰還、P.213。新潮文庫 東京、1985。
21. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.180。
22. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.181。
23. 富山太佳夫：シャーロック・ホームズの世紀末、P.211。青土社、東京、1993。
24. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P72～73。
25. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.205。
26. M.ジルアード(高宮利行、不破有理訳)：騎士道とジェントルマン、P.239。三省堂、東京、1990。
27. 小石原美保：学校小説の中のアスレティシズム、体育の科学、Vol.43,6。P.442。東京、1990。
28. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P109。
29. C.Doyle：Rodney Stone, P.294。London, 1901。
30. C.ドイル(深町真理子訳)：シャーロック・ホームズの事件簿、P.403。新潮文庫、東京、1991。
31. P.メイソン(金谷展雄訳)：英国の紳士、P.117。晶文社、東京、1991。
32. 富山太佳夫：前掲書、P206。
33. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P130。
34. 村岡 健次、鈴木利章、北川 稔編、：前掲書、P.259。
35. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.293。
36. C.ドイル(上野 謙訳)：前掲書、P.294。
37. 村岡健次、木畑洋一編、：イギリス史、3。— 現代世界歴史体系 —、P.119。山川出版、東京、1990。
38. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.319～320。
39. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.83。
40. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.20。
41. B.サイモン(成田克矢訳)：イギリス教育史、II、P.213。亜紀書房、東京、1980。
42. P.C.マッキントッシュ(加藤橋夫、田中 鎮雄訳)、：近代イギリス体育史、P.112。ベースボールマガジン社、東京、1983。
43. S.ハンフリーズ(山田 潤、P.ビリングズリー、呉 宏明訳)、：大英帝国の子どもたち、P.66。柘植書房、東京、1990。
44. S.ハンフリーズ(山田 潤、P.ビリングズリー、呉 宏明訳)、：前掲書、P.252。
45. C.ドイル(延原 謙訳)、：前掲書、P178。
46. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.241。
47. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.161。
48. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.241。
49. 富山太佳夫：前掲書、P.298。
50. J.A.ホブソン(矢内原忠雄訳)：前掲書、P.33。
51. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.265。
52. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.292。
53. C.ドイル(阿部知二訳)：前掲書、P.339。
54. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.47。
55. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.297。
56. H.D.Mile、：Puglistica ; The History of British Boxing, Edinburgh, 1906。
57. 富山太佳夫：前掲書、P.203。
58. 松井良明：規範としての文化、『文化総合の近代史』、P.173。平凡社、東京、1990。
59. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.299。
60. 松井良明：前掲書、P.474。
61. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P.138。
62. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P.140。
63. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P.141。
64. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P.142。
65. C.ドイル(上野景福訳)：前掲書、P.170。
66. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、P.299。
67. 松井良明：前掲書、P.488。
68. C.ドイル(延原 謙訳)：前掲書、p.298。
69. C.Doyle, op.cit., P.251。

70. C.Doyle, op. cit., P.252.
71. C.ドイル(延原 謙訳) : 前掲書、P.300
～301.
72. ドイル(延原 謙訳) : 前掲書、P.301.
73. J.A.ホブソン(矢内原忠雄訳) : 前掲書
,P.135.
74. E.B.Michell, : Boxing and Sparring,
Fencing, Boxing, Wrestling.(The Bad-
minton Library of Sport and Pastimes
) , P.146. London.1890.
75. C.ドイル(延原 謙訳) : 前掲書、P.301.
76. 石川 輝 : ボクシングの歴史、『最新ス
ポーツ大辞典』、P.1178. 大修館、東京
、1987.
77. Lord Byron, : journal, Vernon Scannel
(Chosen by), Sporting Literature ;
An Anthology, P.155. 1987.
78. C.ドイル(上野景福訳) : 前掲書、 P.137
.
79. 富山太佳夫 : 前掲書、P.211.
本研究が上記の文献に依拠しながら展開さ
れていることを付記しておく。

(受理 平成 7年 3月20日)